

日本英文学会東北支部 第 77 回大会資料

時：2022 年 12 月 10 日（土）

所：岩手大学上田キャンパス教育学部
（盛岡市上田 3-18-33）

日本英文学会東北支部事務局

〒960-1296 福島市金谷川 1 番地

福島大学 人間発達文化学類 高田英和研究室内

電話：024-548-8156／E-mail：tohoku@elsj.org

日 本 英 文 学 会 東 北 支 部

2022 年度 大会役員一覧

(敬称略)

支 部 長	川 田 潤				
副 支 部 長	大 貫 隆史				
理 事	大 西 洋一	金 子 淳	木 村 宣美		
	境 野 直樹	佐 々 木 和貴	島 越郎		
	鈴 木 亨	竹 森 徹士	福 士 航	(五十音順)	
大 会 準 備 委 員	大 貫 隆史	酒 井 祐輔	大 野 朝子		
	齋 藤 章吾	深 谷 修代			
開 催 校 委 員	高 橋 愛				
事 務 局	高 田 英和 (事務局長)	川 崎 和基 (事務局長補佐)			
	佐 藤 元樹 (事務局員)				

*懇親会は、コロナウィルス感染症の状況に鑑み、本年度は開催しません。

日本英文学会東北支部第 77 回大会プログラム

時：2022 年 12 月 10 日（土）

所：岩手大学上田キャンパス教育学部
（盛岡市上田 3-18-33）

理事会 11 時 00 分より（E22 教室〔総合教育研究棟（教育系）〕）

開会式 12 時 30 分より（G201 教室〔教育学部 2 号館〕）

□開会の辞

日本英文学会東北支部長 川 田 潤

研究発表

第 1 発表 13:00 — 13:30 第 2 発表 13:30 — 14:00
第 3 発表 14:00 — 14:30 第 4 発表 14:30 — 15:00

英米文学部門（G201 教室〔教育学部 2 号館〕）

司会 秋田大学名誉教授 佐々木 和貴

1. 『傷心の家』とソクローフ『痛ましき無関心』における麻痺のモチーフ

岩手大学特任助教 松 本 望 希

司会 山形県立米沢女子短期大学准教授 小 林 亜 希

2. “Cold Philosophy” から考える *Island* (1962) の神秘と科学

東北学院大学大学院 高 城 翔 平

司会 宮城教育大学教授 竹 森 徹 士

3. 「故郷」を探して：アラン・ブース『ニッポン縦断日記』における東北表象

八戸工業高等専門学校准教授 菊 池 秋 夫

司会 東北学院大学准教授 井 出 達 郎

4. 戦争を脱昇華する——『本当の戦争の話をしよう』における想起

東北学院大学特任准教授 野 崎 直 之

英語学部門 (E26 教室 [総合教育研究棟 (教育系)])

司会 岩手県立大学准教授 ルプシャ・コルネリア・ダニエラ

1. 語彙的アスペクトからみる「とき」節の解釈

東北大学大学院 近 森 藍 璃

2. 感嘆文における sluicing について

福島大学准教授 佐 藤 元 樹

司会 弘前学院大学講師 齋 藤 章 吾

3. Form Copy と下位コピーの発音による透明的自由関係節の派生

東北大学大学院 平 塚 哲 郎

4. ラベル理論における主要部の(不)可視性と移動の随意性

東京理科大学准教授 菅 野 悟

中部大学助教 田 中 祐 太

九州大学准教授 大 塚 知 昇

弘前大学講師 近 藤 亮 一

SYMPOSIA (15:15 – 17:30)

英米文学部門 (G201 教室)

ルポルタージュ・フィクション・戦争——1930-40 年代の英語圏文学

司会・講師 日本女子大学教授 川 端 康 雄

講師 上智大学教授 松 本 朗

講師 山形大学准教授 三 枝 和 彦

英語学部門 (E26 教室)

ラベル決定アルゴリズムの可能性

司会 弘前学院大学講師 齋 藤 章 吾

講師 旭川医科大学准教授 戸 塚 将

講師 北海道教育大学講師 佐 藤 亮 輔

講師 東北大学専門研究員 廣 川 貴 朗

講師 東北大学専門研究員 堤 博 一

研 究 発 表

英米文学部門

司会 秋田大学名誉教授 佐々木 和貴

『傷心の家』とソクローフ『痛ましき無関心』における麻痺のモチーフ

岩手大学特任助教 松 本 望 希

本発表は、バーナード・ショー『傷心の家』(*Heartbreak House*, 1920) とその映画化作品であるアレクサンドル・ソクローフ『痛ましき無関心』(1983) に共通する「麻痺」のモチーフに着目し、第一次世界大戦が社会に与えた影響を両作品がどのように描いたのか明らかにすることを目的とする。

ショーによる序文によって、“cultured, leisured Europe before the war” と語られる傷心の家は、それに反して、ツェッペリンの爆撃やダイナマイトの爆発など、第一次世界大戦の影を見出すことができる。そこで描かれるのは、戦争という大きな脅威によって、文字通り「心が壊れた」中産階級の人々である。イギリスとロシア、そして第一次世界大戦期とソビエト崩壊以前という別々の国と時間において描かれる、大戦がもたらした危機について分析し、両者が作中でどのように大戦を位置づけているのか考察する。

司会 山形県立米沢女子短期大学准教授 小 林 亜 希

“Cold Philosophy” から考える *Island* (1962) の神秘と科学

東北学院大学大学院 高 城 翔 平

Aldous Huxley (1894-1963) の長編小説 *Island* (1962) は、インド洋上の架空の島国、西洋と東洋の最善の融合を目指した国、Pala を舞台としたユートピア物語である。Pala の人々が目指す悟りの状態では、あらゆるものは美しく、すなわち真理であるという。これは John Keats (1795-1821) がしばしば示す詩想である。対立の中で生まれ進歩する Pala は、最終的には一つの真理への統合を目標としている。しかしこの試みは、軍事政権の隣国 Rendang の侵攻によって潰える。

本発表では、Pala 崩壊の要因を宗教と科学の対立にあるとする Warchał の指摘を取り上げ、“Lamia” (1819) における Keats の主張、文学に示される神秘が “Cold Philosophy” によって失われるという考えを参考に考察する。理想の国家というある種の神秘を減ばす “Cold Philosophy” とは何か、そしてその反対に国家を理想に導く “Philosophy” とは何かということを、Huxley の主張に沿って、ポストモダン、そして現代の知見から明らかにしたい。

「故郷」を探して：アラン・ブース『ニッポン縦断日記』における東北表象

八戸工業高等専門学校准教授 菊 池 秋 夫

日本の東北地方は、かつて「みちのく」の地名で様々な文学テキストでイメージされてきた。日本の東北地方に関しては、18世紀江戸時代に日本各地を旅し詳細な記録を残した菅江真澄（1754-1829）の旅行記においても東北・北海道の窮状を伝えるのみならずみちのくの歴史が読者に伝えられている。英文学の中で、日本の東北地方が feature されている作品は決して多くないものの、イザベラ・L・バード（Isabella Lucy Bird, 1831-1904）の *Unbeaten Tracks in Japan* のように、vivid な現地の表象がなされている作品もある。バードが明治期の日本表象に多大な貢献をなしたことは論を待たない一方、現代の東北に関しては、アラン・ブース（Alan Booth, 1946-1993）が果たした役割に関して十全に論じられてきたとはいえない。1970年代、1980年代の日本は戦後の混乱期を脱し、1964年の東京オリンピックに代表されるような経済成長に向かっていった。一方、そうした社会の変動に必ずしも連動していないアンビバレントな状況に関して、ブースが自らの足で回って記録した内容をまとめた『ニッポン縦断日記』（*The Roads to Sata*）は、東北の持つ時代の変化と地域の表象を通じて地域の持つイメージ形成に少なからぬ役割を果たしている。本発表では、ブースの『ニッポン縦断日記』における東北地方の表象を、ステレオタイプのイメージとの比較の中で特徴を探っていき、ブースによる具体的で日常的な東北地方のイメージ形成の過程を明らかにしていきたい。

司会 東北学院大学准教授 井 出 達 郎

戦争を脱昇華する——『本当の戦争の話をしよう』における想起

東北学院大学特任准教授 野 崎 直 之

本論は、Thomas J. Otten がその *A Superficial Reading of Henry James: Preoccupations with the Material World* において提起した「表面的読解」の手法を援用することで、Tim O'Brien のベトナム戦争小説 *The Things They Carried* の新たな一面に光を当てることを目指す。オッテンの「表面的読解」は、テキスト読解による理論的抽象化を拒み、「意味」（sense）と「感覚」（senses）との分かちがたさへの注目を促す。吹き飛ばされた兵士の死体の断片を拾い集めるオブライエンという。「血糊はおぞましいものだった。それはまだ私にこびりついている」。テキスト表面に擦りつけられたこの血糊は、オブライエンとベトナムのみならず、かれのことばとそれが指し示すものを糊着させている。オブライエンが繰り返し「感じること」を求めるように、かれのことばのより身体的な層に感受性を調和させるとき、われわれは、戦争が断片化した（dismember）全人的な感覚と尊厳を、想起を通して取り戻そう（re-member）とする、作家の希望と絶望の両者を感じ得ることができるように思われる。

語彙的アスペクトからみる「とき」節の解釈

東北大学大学院 近 森 藍 璃

「とき」節は同時の解釈だけでなく直前・直後の解釈があることが観察されている(Oshima (2011))。本発表は、そのような「とき」節の多義的な解釈は、主節と「とき」節の語彙的アスペクト(Vendler (1967))の相互作用により生じていると提案し、特に活動動詞、達成動詞、到達動詞が組み合わさる場合の解釈を分析する。また、それぞれ三つの動詞は活動動詞は[+process]、達成動詞は[+process, +transition]、到達動詞は[+transition]の性質を持ち、主節・とき節に[+process]の動詞を持つ場合、その文の解釈は多義的になるという一般化を示す。

そして本発表では、Demirdache and Uribe-Etxebarria (2004)の統語的な時の副詞節への提案を採用・一部変更し、上記の一般化に対し統語的な説明付けを与えることを試みる。具体的には、主節・とき節の EV-T (出来事時)がそれぞれ語彙的アスペクトの解釈を反映し、その節の時制によりその動詞のアスペクトが示す最終的な解釈が決定され、最後に主節と「とき」節の組み合わせにより同時、前後の解釈が生じると分析する。

感嘆文における sluicing について

福島大学准教授 佐 藤 元 樹

英語における sluicing は、wh 疑問文に限られた省略現象であり、wh 句が生起していたとしても、関係節、分裂文、自由関係節では認められないことが知られている。Merchant (2001)は、sluicing の分布を捉えるために、節削除の認可条件として、C 主要部が[+wh, +Q]であることを提案している。この認可条件は、関係節における節省略を排除するだけでなく、[-wh, +EXCL]といった特有の CP が仮定されている wh 感嘆節に関しても、sluicing が適用不可能であることを予測する。本発表では、この予測は、言語事実に照らし合わせると部分的にしか支持されないことを示す。間接感嘆文では、一般的に、sluicing が容認されない傾向にあるが、wh 感嘆文における sluicing の可否は、remnant である wh 句の種類や wh 節を選択する述語の語彙特性によって左右されることを論じる。

Form Copy と下位コピーの発音による透明的自由関係節の派生

東北大学大学院 平 塚 哲 郎

本発表は、英語の透明的自由関係節(Transparent Free Relative 以下 TFR)が、Chomsky (2021)の Form Copy と下位コピーの発音によって派生されると主張する。TFR は、[What seem to be [several jets]] *was / were landing on the freeway. (Citko (2011: 98))のように、自由関係節内にピボット(several jets)と呼ばれる要素があり、これが自由関係節の意味的な主要部として機能している構文である。本発表は、ピボットは主節と TFR 節内の両方に存在しており、主節のピボットに TFR 節が付加し、これら 2 つのピボットが Form Copy によってコピー関係を得ると考える。また、Takano (1998)のコピー削除に関する仮定を採用し、下位のピボットは LF と PF で有標な解釈を与えられるため、主節にある上位のピボットではなく、TFR 節内の下位のピボットが発音されると主張する。このように、主節にもピボットが存在すると考えることで、ピボットと主節動詞の数の一致現象をはじめ、ピボットと主節の関係を示す経験的事実や、TFR 節内部からの抜き出しに対して説明を与えるを試みる。

ラベル理論における主要部の(不)可視性と移動の随意性

東京理科大学准教授 菅 野 悟

中部大学助教 田 中 祐 太

九州大学准教授 大 塚 知 昇

弘前大学講師 近 藤 亮 一

本発表の目的は、ラベル理論(Chomsky 2013, 2015)のもと、移動の義務性・随意性に原理的な説明を与えることである。Otsuka (2017)の議論を応用し、V から v*へと主要部移動する際、下位の V が統語的操作にとって不可視的となる派生と、これとは逆に、可視的となる派生が存在すると仮定する。これにより、v*からの素性継承が生じる際、素性を V へ受け渡す通常の素性継承に加えて、素性をより下位の主要部へ受け渡す長距離素性継承が存在すると主張する(cf. Kanno 2019)。この 2 種類の素性継承のもとで例外的格標示構文における目的語繰り上げの随意性を適切に捉えることができると論じる。この分析の帰結として、併合優先原理(Chomsky 1995)により捉えられてきた非文法性が正しく説明されることを示す。最後に、英語においては上述の 2 つの随意的派生に課される一種の優先性があると主張し、さらなる帰結を探る。

15 時 15 分
SYMPOSIA

英 米 文 学 部 門 (G201 教室)

ルポルタージュ・フィクション・戦争——1930-40 年代の英語圏文学

司会・講師 日本女子大学教授 川 端 康 雄
講師 上智大学教授 松 本 朗
講師 山形大学准教授 三 枝 和 彦

新型コロナウイルスの流行が、ペストや「スペイン風邪」などの歴史上の流行病について、それに触発された文学作品と併せて、私たちに新たな目で振り返るようにしむけたように、2022 年 2 月末に始まったロシアによるウクライナ侵攻は、過去のさまざまな戦争、とりわけ第二次世界大戦とそれに関連する文学をより生々しくリアルな目で捉え返す契機になったように思われる。この機会に本シンポジウムでは 1930 年代から 40 年代、すなわち両大戦間期の後期から第二次世界大戦期、また冷戦初期の時代にかけて戦争を扱った 3 人の英国作家、レベッカ・ウェスト、イーヴリン・ウォー、ジョージ・オーウェルの仕事を取り上げる。「戦争」に加えて、表題に示したように「ルポルタージュ（ドキュメンタリー）」と「フィクション」をキーワードとするが、前者を「事実」、後者を「虚構」として二項対立的に捉えるよりも、むしろその区分自体の妥当性を疑い、ルポルタージュ文学のなかの虚構性、小説作品のなかの事実性に注意を払いつつ、この作家たちの文学的達成について報告と討議を行いたい。

女性知識人とルポルタージュ
——レベッカ・ウェストが考える文化、戦争、ヨーロッパ

松本 朗

スコットランド出身の作家レベッカ・ウェスト (Rebecca West, 1892-1983) は、小説家としてのキャリアを積み重ねる一方で、新聞や定期刊行物等のジャーナリズムで芸術や政治を論じる評論を発表して、エリート主義的な盛期モダニズムの文学を一般的な読者大衆に向けて開く役割を果たした知識人として知られる。そのように異なる階層を繋ぐ仕事を意識的に行ったウェストは、文学のジャンルについても横断的な姿勢をとっており、それは評論ともフィクションともつかぬ形式で書かれた “The Strange Necessity” (1928) からも窺える。この評論においてウェストは、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』を意識した語りのスタイルで芸術論を展開するのだが、興味深いことに、ここでは個人の芸術作品が “super-cortex” なる “shared national cultural tradition” の一部となると論じられ、個人と共同体の関係が考察される。ウェストはこの関連の思索を *Black Lamb and Grey Falcon* (1942) で深めている。これは彼女が 1930 年代後半にブリティッシュ・カウンシルの依頼でユーゴスラヴィアを旅した際のことを記した旅行記だが、この旅行記は同時に、ユーゴスラヴィアの人々の生活の観察から練り上

げられた彼女の芸術・文化論として、あるいは、ナチスの動向に慄きつつヨーロッパ各国の反応を注視するバルカン半島の人々を描写するルポルタージュとして、読むことができる。本報告では、文化、戦争、ヨーロッパをキーワードにウェストのこの著作を読み、ルポルタージュというジャンルについて考察したい。

イーヴリン・ウォーの『アビシニアのウォー』と『スクープ』における フィクションとルポルタージュの関係

三枝 和彦

第二次世界大戦に向かってヨーロッパ諸国間の政治的緊張が高まりを見せる中、ファシスト党を率いるムッソリーニが独裁政権を敷くイタリアは、1935年10月にエチオピア侵略を開始し、翌36年5月に同国を併合した。侵攻が宣言されてからは100人を超える特派員が戦況を伝えようと首都アディスアベバに滞在し、イーヴリン・ウォー (Evelyn Waugh, 1903-66) もデイリー・エクスプレス紙 (*The Daily Express*) の戦地特派員として派遣されていた。30年代のウォーは、外国に出かけては旅行記を書き、更にそこから着想を得て小説を創作するというサイクルを繰り返していたが、この時も旅行記『アビシニアのウォー』 (*Waugh in Abyssinia*, 1936) に続き、小説『スクープ』 (*Scoop*, 1938) を上梓している。『ラベル』 (*Labels*, 1930) に始まるウォーの旅行記は虚構性が高いと言えるが、その副産物たる小説は、それとは反対に実録性が高いと言えるかもしれない。実際、ジャーナリズムを茶化しめした喜劇的諷刺小説として好評を博した『スクープ』は、“actually a piece of straight reportage, thinly disguised as a novel” と評されるように、実録との境界が曖昧な小説だ。本報告では、『アビシニアのウォー』と『スクープ』を併せて読むことによって、ウォーの作品におけるフィクションとルポルタージュの関係を探ってみたい。

ジョージ・オーウェル『カタロニア讃歌』の語り

川端 康雄

ジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903-50) の『カタロニア讃歌』 (*Homage to Catalonia*, 1938) の刊行から30数年後にレイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams, 1921-88) はこの著作が「二重の政治的理由」のために低評価を与えられていると指摘した。すなわち、共和国政府側の内部闘争についてのオーウェルの説明が性質上論争を招かざるを得ず、左翼の読者の多くを遠ざけるようになったこと、また、オーウェルのいづく「革命的社会主義」へのコミットメントゆえにさらに広範な読者層を遠ざけるようになったこと、という二点である (Williams, Orwell, 1970)。じつさい、初版1500部はオーウェルが没した1950年の時点でまだ売れ残っていた。だが没後徐々に評価が高まり、ルポルタージュ文学の古典とみなされて今日に至っている。本発表では、この著作に見られる、公的・政治的な行動の記録に私的・内面的な思索を併存させるこの作家独特の書法に注目し、彼の仕事全体のなかにこれがどう位置づけられるかを検討する。エッセイ「なぜ書くか」 (Why I Write, 1946) のなかで彼は、自分のどんな政治的な文章でも「本職の政治家ならば不要と思うことがたくさん入っている」と述べた。『カタロニア讃歌』にはそのような一見「不要」に見える些事がたつぷりふくまれている。それがこの著作のなかでどのようなはたらきをしているのか、これも考えてみたい。

ラベル決定アルゴリズムの可能性

司会	弘前学院大学講師	齋 藤 章 吾
講師	旭川医科大学准教授	戸 塚 将
講師	北海道教育大学講師	佐 藤 亮 輔
講師	東北大学専門研究員	廣 川 貴 朗
講師	東北大学専門研究員	堤 博 一

多角的視点に基づくラベル付けアルゴリズムに関する考察

齋藤 章吾

Chomsky (2013, 2015) は、インターフェースにおいて統語構造を適切に解釈するための情報がラベルに基づいて提供されると仮定し、最小探査に基づくラベル付けアルゴリズムを提示している。このアルゴリズムによると、

(i) 主要部と句が併合する統語構造では主要部がラベルとなり、(ii) 句と句が併合する統語構造では、一方の句が移動した後に他方がラベルとなるか、両方の句が共有する素性がラベルとなる。このアルゴリズムは広範の言語現象に対する研究を導いたが、それと同時に、このオリジナルのアルゴリズムでは捉えきれない言語現象のために様々な修正も試みられてきた。本シンポジウムでは、4人の講師が、それぞれの研究テーマの観点から、ラベル付けアルゴリズムの定義に関わる議論を展開する。具体的には、戸塚が文の左周辺部に関わる研究を、佐藤が日本語の VV 複合語を対象にした研究を、廣川が主語位置に名詞句をとらない構文を対象にした研究を、堤が内包的文脈内の要素の解釈を対象にした研究を発表し、それぞれが分析に求められるラベル付けアルゴリズムについて言及する。本シンポジウムでは、多様な視点からオリジナルのラベル付けアルゴリズムの問題点を確認し、このアルゴリズムがどのように定義されるべきかに関して、考察の手がかりを探ることになる。

文の左方周縁部におけるラベル付けアルゴリズム

戸塚 将

Chomsky (2013, 2015) によるラベル付けアルゴリズムは、統語部門が作り出す構造表示が音と意味の両インターフェースで解釈可能となるための役割を果たすものである。このラベル付けアルゴリズムがどのように統語現象に働くかどうかというのが重要な研究となってきた。その成果として拡大投射原理 (EPP) と空範疇原理 (ECP) の統合、that-trace 効果、連続循環移動などの問題に対して統一的に扱えることを示してきた。しかしながら、周縁的な統語現象に対しては十分に取り組まれていないのが現状である。そこで、本発表の目的は Chomsky (2013, 2015) では扱われていない統語現象、特に文の左方周縁部での統語現象にラベル付けアルゴリズムがどのように適用されうるかを考察することである。具体的には英語の話題化構文、焦点化構文、分裂文に

どのようにラベル付けアルゴリズムが働くかを見ていく。さらにラベル付けアルゴリズムの違いから話題化構文と焦点化構文の非対称性が導かれる可能性や Rizzi (2006)で提案されている基準凍結 (Criteria Freezing) に対しても再検討の必要性があることを検証していく。

ラベル付けアルゴリズムと日本語の VV 複合語

佐藤 亮輔

Chomsky (2013, 2015)以降、統語体のラベル付け方法が活発に議論されている。しかし、Chomsky (2013, 2015)ではもっぱら句と句が併合された場合のラベル付け方法についてのみ議論されており、主要部と主要部が併合された場合のラベル付け方法については、十分明らかとはなっていない。この点から、日本語の VV 複合語のラベル付け方法について議論することは、ラベル付けアルゴリズムのさらなる発展のために非常に重要である。

日本語では、2つの動詞を組み合わせることで複合語を作成可能であるが、この複合語は、その統語的性質から語彙的 VV 複合語と句 VV 複合語に分類される。これらの複合語には、例えば助詞が複合語内部に生起可能かどうか(例: *泳ぎはつく vs. 食べてはみる)、尊敬語が生起可能かどうか(例: お飲み比べになった vs. *お飲んでしまいになった)といった点で異なった振る舞いを見せる(Kageyama (2016))。

句 VV 複合語が文字どおり「句」であれば、Chomsky (2013, 2015)のラベル付けアルゴリズムをそのまま援用できる可能性がある。しかし、少なくとも語彙的 VV 複合語については、新たにアルゴリズムを考え直す必要がある。本発表では、日本語のこれらの VV 複合語分析のために新たなアルゴリズムを模索し、その帰結を議論していきたい。

名詞句が主語位置に生起しない文のラベル付けについて

廣川 貴朗

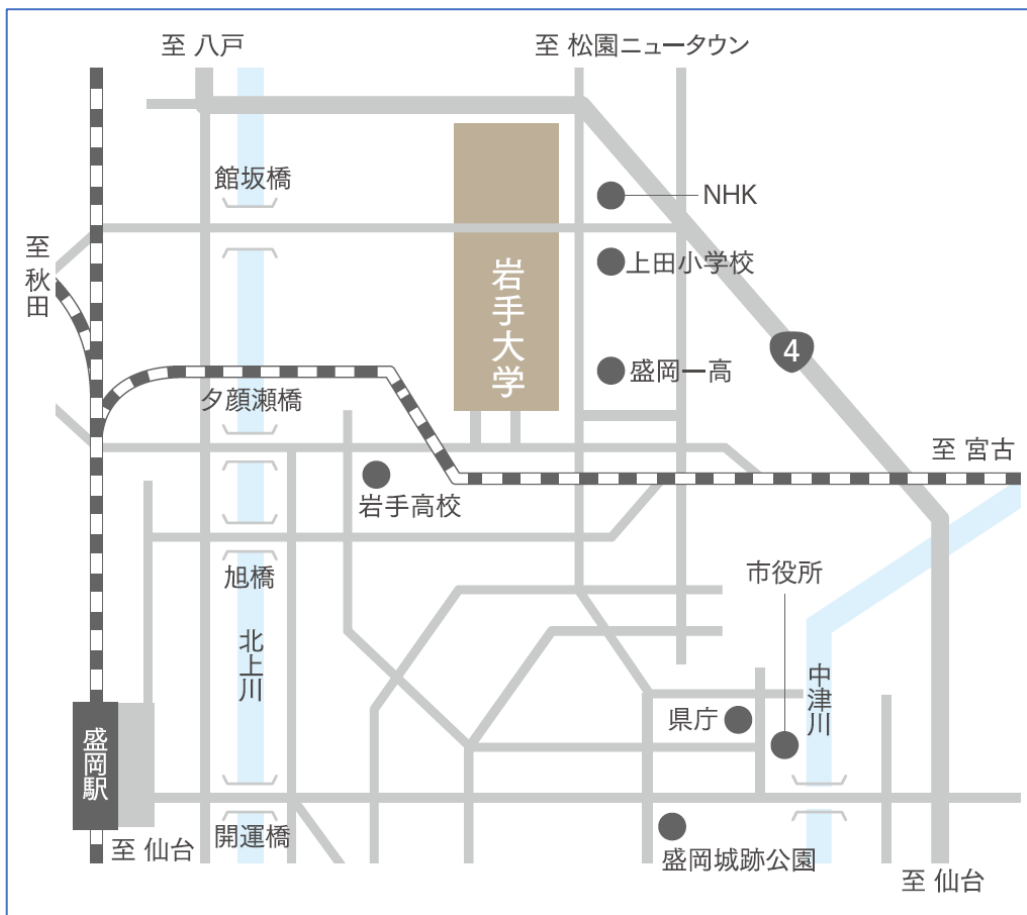
Chomsky (2015)は、Chomsky (2013)において提案されたラベル付けアルゴリズムを発展させ、「英語では T 主要部が弱いために素性共有による $\langle \phi, \phi \rangle$ ラベルが義務的である」と提案し、英語に見られる EPP, ECP の効果が導かれると主張した。これに反して、本発表では T はラベルになることができる (Chomsky (2013)) と仮定することで、表面上名詞句が主語位置 (従来の Spec,TP) に現れないような事例を分析する。具体的には、(i)CP, PP, AP 等の非名詞句が主語として生起する非名詞句主語文や、(ii)動詞が主語に先行する倒置文 (場所句倒置等) をラベル付けの観点から分析する。(i)非名詞句主語の事例に関しては、非名詞句主語が通常の名詞句とは構成の異なる ϕ 素性をもつ DP であると仮定し、非名詞句主語の最終着地点が主語位置 (Spec,TP) となる場合には T 主要部との素性共有による $\langle \phi, \phi \rangle$ ラベルが付き、CP 領域となる場合には TP ラベルが付くことができると分析する。(ii)倒置文の事例については、文頭に生起した場所句や副詞句等が動詞との一致を示さず、また動詞と一致する名詞句が主語位置 (Spec,TP) に生起しないため $\langle \phi, \phi \rangle$ ラベルが付かず、TP ラベルが付くと分析する。

本発表は、ラベル付けアルゴリズムによる非頭在的移動の導出について論じる。(i) 統辞体のラベルは SM システムによる音韻的解釈のために必要であり、C-I システムによる意味解釈には関与せず (Takita (2002))、(ii) $XP1$ と $XP2$ がコピーであるような統辞体 $\alpha = [XP1 [YP \dots XP2 \dots]]$ において、 $XP1$ の代わりに $XP2$ を発音することによっても α のラベルを決定可能である (Oku (2018, 2021)) と提案し、その帰結を探る。

本発表の分析対象は、内包的文脈に出現する DP の事象様相 (de re) 解釈及び言表様相 (de dicto) 解釈に次ぐ第三の解釈 (Fodor (1970)) である。これは、DP の量子子としての作用域が内包的文脈内で与えられると同時に、量化領域を制限する NP の外延が内包的文脈ではなく発話文脈において評価される解釈である。この解釈は、DP 補部の制限子 NP が内包演算子作用域外へ非頭在的に移動 (制限子上昇) し、その指示値の評価文脈が発話世界に変更されることで導出されると主張する。

このほか、(i) 量子子上昇が一般に節制限性を示す一方で、制限子上昇が統語的島を越えて適用可能であることや、(ii) 英語では量子子上昇も制限子上昇も非頭在的である一方で、日本語では制限子上昇のみが非頭在的であり量子子上昇が頭在的かき混ぜの形式をとること、(iii) 外延の評価文脈を変更するための非頭在的移動は述語位置の XP には適用できないことも指摘し、その理由を検討するつもりである。

○大会会場（岩手大学上田キャンパス教育学部）へのアクセス



周辺地図①

盛岡駅からのアクセス

上田キャンパス

バスをご利用の場合

【教育学部へ】

バス路線	バス乗り場	下車バス停（所要時間）
岩手県交通 駅上田線 松園バスターミナル行き	盛岡駅前東口バスターミナル11番	岩手大学前（約10分）
岩手県交通 駅桜台団地線 桜台団地行き	盛岡駅前東口バスターミナル11番	岩手大学前（約10分）



周辺地図②

タクシー・車をご利用の場合

- 盛岡駅から約2km／約10分

徒歩の場合

- 盛岡駅から約2km／約25分

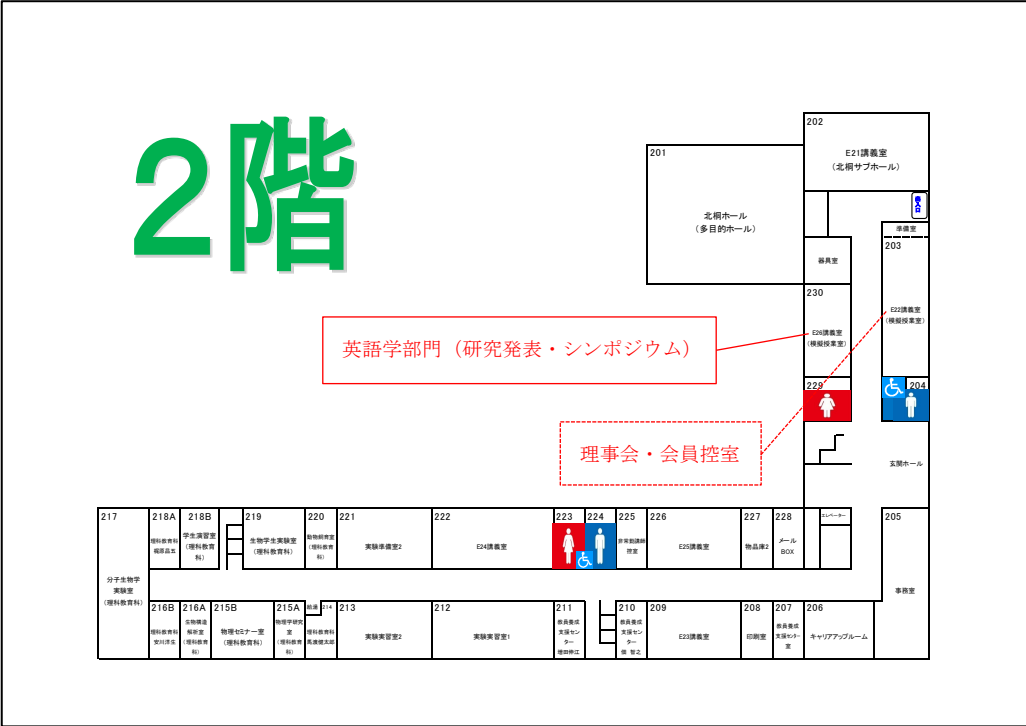


キャンパス・マップ①



キャンパス・マップ②

○施設平面図①（総合教育研究棟（教育系）2 階）



○施設平面図②（教育学部 2 号館 2 階）

